

■ 研究レポート ■

実作品を用いたソルフェージュ教材および学習法への提案

— C. ドビュッシー《前奏曲集第1集》を題材として —

高 谷 典 子・岸 美 奈 子・齋 藤 圭 子・早 川 聡 美

1. 序

1-1. 問題の所在

ソルフェージュが指し示す言葉の意味や内容は、時代と共に変化し続けてきた。現代にいたる広義のソルフェージュは、19世紀のフランスを中心として確立されたものであり、音楽の基礎事項を幅広く担っている。その最終的な目的は、学習者が自らの力で楽譜から様々な情報を読み取り、鋭い感覚と知性をもって、音楽的な表現を導き出す力を養うこととされている。

専門教育課程におけるソルフェージュ教育の意義は、個々の学習事項が専攻実技に十分に生かされること、すなわち、学習者が習得した能力を各々の音楽表現に結びつけられるようになることであり、これができる初めて、この科目は音楽の中で息吹くことができる。しかしながら、この学習プロセスをうまく機能させることができない学習者は少なくない。

その解決方法のひとつとして、1978年に提唱されたのが「フォルマシオン・ミュージカル（以下FM）」である。それまでのソルフェージュは、慣例的に聴音、視唱、リズムなどの学習項目ごとに細分化され、実施されるものであった。この細分化は、学習要素をより明確にし、要素ごとの効率的な習得を標榜したものである。この細分化に基づいた特殊な訓練により、上位の学習者たちは豊富な理論的知識や正確な音程、様々な音部記号や複雑なリズムをも難なく読みこなす、技巧的な読譜力を身につけることができた。しかし同時に、得られた力が音楽の表層部分に留まるものであり、細分化された学習の成果を実際の楽曲の中で再統合し、楽曲全体の理解や音楽表現に生かすことができていない学習者が多く存在することが問題視されるようになった。

このような背景からFMはフランスで導入され、すでに30年以上が経過した。現在、日本においてもFMは多くの教育機関で取り入れられている。このFM＝「音楽形成」を意味する総合的な音楽学習の最大の特徴は、実際の楽曲を教材として用いることであり、習得した知識や能力を楽曲へ結びつけるプロセスを学ぶことで、個々の音楽的な表現へと促すことである。しかしFMは、従来のソルフェージュを根底から否定するものではない。FMによる学習のみでは、楽曲中の様々な要素を「体験する」次元に留まってしまう恐れがある。それゆえ、それらの要素を「獲得する」という次元まで到達させるためには、やはり従来のソルフェージュの特定の要素に着目した集中的な訓練も不可欠であり、現場では使用する楽曲との関連性を十分に考慮しながら、FMとソルフェージュが

並行して実施されることが望ましいといえるだろう。

FMの最大の利点には、実作品を用いることにより、学習者がソルフェージュの学習事項と楽曲との結びつきを強く感じられることが挙げられている。特に、バロックからロマン派の楽曲においては、この時代に用いられた様式や音楽語法の全般に対し、大きな効果が期待できるといえる。作曲家ごとに個性は異なるが、共通した音楽語法が非常に多く用いられているため、これらを系統立てて学習することで、様々な楽曲に応用することが比較的容易であるためである。

一方、問題点には、実施において指導者には準備に多くの時間が必要となること、さらに適切な選曲と課題作成において能力やセンスが求められることが挙げられている。換言すれば、指導者の能力によって、FMはその効果が大きく左右されることである。

例えば、視唱や聴音、リズムなど個々の学習項目において、対象となる学習者に相応しい課題を設定することはさほど難しいことではない。しかし、限られた教育環境において、ある実作品のみから音楽活動に不可欠な学習要素を網羅することは困難であり、またそれらの項目に合致した「総合的」な学習に相応しい楽曲を精選したり、授業ごとに指導内容を準備するためには、楽曲に関する広範囲な知識が必要とされる。しかし、適切な課題が設定されている教材を既存のものから見つけ出すのは極めて困難である。

19世紀後半以降の、拡大し続ける様式や音楽語法に対しても、FMは同様に大きな効果を期待できると考えられているが、様式と音楽語法の多様化に対応できる教材は、いまだ十分ではない。現在では、国内外の様々なFMの教材を入手することができるが、いざ大学の授業で実践しようとした時、使用できるものはそれほど多くはなく、楽曲ごとに分析方法を見出さなければならないことも多い近代の音楽を理解するためには、さらに多くの楽曲を題材とした教材が必要とされている現状がある。

1-2. 先行研究

日本におけるFMに関する研究論文は17稿ほどあり、その内容は、ソルフェージュからFMに至った経緯、FMの学習計画と学習法、教材開発と開発教材の実践事例に大きく分類されるが、近代の楽曲に焦点を当てた研究はほとんどない¹⁾。

他方、FM教材は、国内外で多数出版されている。初級から上級レベルまで、段階的な学習を目的としているFM教材の代表的なもので、かつ近現代の楽曲を含むものには、アラン・トゥルショ Alain Truchot とミッシェル・メリオ Michel Meriot による『フォルマシオン・ミュージカルのガイド *Le Guide de Formation Musicale*』（パリ、1987 - 91）²⁾ と、ピエール・シェペロヴ Pierre Chépélov とベノワ・

1) 2018年12月現在。Cinii 検索サイトより。

2) 『フォルマシオン・ミュージカルのガイド』は全9巻で構成され、1回の授業で、理論、読譜、リズム練習、音程練習、視唱、聴音、分析の項目をそれぞれ学習できるよう課題が設定されている。

ムニュ Benoît Menut による『音楽の聴音 ——リズム、旋律、和声、音色—— *La dictée en musique. Rythme, mélodie, harmonie, timbre*』（パリ、2002 - 09）³⁾がある。両者ともルネサンスから現代まで、様々な編成による楽曲が使用され、ドビュッシーを含む近代の作品は、全ての巻に数曲ずつ選曲されている。前者では、視唱に実作品が用いられているが、ピアノ伴奏付き歌曲や、様々な編成の器楽曲がピアノ伴奏付き視唱に編曲された楽譜が掲載されているのみである。実作品を総合的な学習の教材としてではなく、視唱教材としてのみ扱っている。そして、視唱を実施する過程で必要な予備練習や知識に関する学習は設けられておらず、全て指導者に委ねられている。

後者は、主に音高とリズムの書き取りが中心であった従来の聴音学習に対し、音楽の様々な要素に焦点を当て、これらを認識する能力を養うことを目指しているが、聴音に特化した教材であるため、視唱や理論で学ぶことのできる要素がある楽曲も、聴音学習にとどまっている。また、取り上げられているのは楽曲の一部であり、楽曲全体を学習するものにはなっていない。

上記の2教材に限らず、多くのFM教材で、課題を実践するための過程で必要となる諸学習については指導者の裁量に委ねられている。しかし、単に実作品に触れるだけで学習が終えられた場合、学習事項を他の作品へと応用することができない。したがって、FMによる学習効果を十分に引き出すために、実践の過程において指導者を補完することのできる教材開発には、一定の有用性を見出すことができるだろう。

1-3. 目的と方法

本稿は、近代作品を使用したFM教材開発の試みをレポートするものであり、かつ、指導者の実践の一助となる教材の在り方への基礎的取り組みとなることを目的としている。ここでは、クロード・ドビュッシー *Achille-Claude Debussy* (1862-1918) の《前奏曲集第1集 *Préludes premier livre*》を題材とし、実際の楽曲に取り組む際に、音を出す前にまず行うべき楽曲へのアプローチを具現化し、そのプロセスを学習することを提案している。

この曲集を選定した理由は、ドビュッシーが近代音楽を代表する作曲家の中でも、高い芸術性を持ち、相反して大衆性も兼ね備えた類まれな作曲家であることから、音楽大学のあらゆる専攻の学習者を対象とするのに相応しい作品群であると考えられるためである⁴⁾。

ドビュッシーの楽曲には、全音階によらない音階や音組織、機能と声によらない和音の連結、調性からの逸脱、拍子やリズムの自由な扱い方など、多くの近代音楽に用いられている音楽語法が豊富に含まれており、ドビュッシーの他の楽曲はもちろん、19世紀末以降の多くの楽曲へと応用し、

3) 『音楽の聴音 ——リズム、旋律、和声、音色——』は全7巻で構成された実作品を用いた聴音課題集であり、リズム、旋律、和声、楽器の音色、それぞれの要素に焦点を当てた課題や、間違い探しの課題が設けられている。

4) 例えば、ピアノ曲では《子供の領分 *Children's corner*》、《2つのアラバスク *Deux arabesques*》、《ベルガマスク組曲 *Suite bergamasque*》など大変親しみやすい作品を多数残しており、演奏会以外の場でも耳にする機会が多い。また、標題を持つ作品が多数を占め、想起されるイメージと音楽とを結びつけやすい。

役立てられるものである。また、《前奏曲集》に含まれる各作品は小規模であるが、ドビュッシーの様々な音楽語法が随所に散りばめられ、楽曲の一部だけではなく全体像を把握し、学習することが可能であり、各作品の、標題ごとに変化する曲想を感じ取り、標題ごとに選択される音楽語法（広義的な意味での音楽語法とも言える）を比較しながら学ぶこともできる。FM の題材として理想的な要素を、いずれも擁する作品群であるといえる。そしてなにより、各曲の曲想が変化に富み、ドビュッシーの魅力を学びながら存分に味わうことができることも理由のひとつに挙げることができるだろう。

《前奏曲集》の中から、本稿では、第1曲〈デルフィの舞姫たち *Danseuses de Delphes*〉、第4曲〈音と香りは夕暮れの大気に漂う *Les sons et les parfums tournent dans l'air du soir*〉、第6曲〈雪の上の足跡 *Des pas sur la neige*〉、第8曲〈亜麻色の髪のおとめ *La fille aux cheveux de lin*〉の4曲を取り上げ、次のような手順を提案している。

まず、①それぞれの楽曲についての特徴を挙げ、各曲で学ぶべき学習要素を抽出する。②ソルフェージュの観点によるアプローチ、すなわち読譜、視唱、リズム練習、聴音、鍵盤和声、分析の学習項目を通して、演奏表現へと導くための教材と具体的な学習法を提案し、譜例とともに示す。③学習要素をより捉えやすくするための練習や助言が必要な場合は、予備練習を設け、補足として解説を加える。楽曲をそのまま課題として用いることが難しい場合は、学習要素を明らかにするために編曲したうえで課題として示す。その際には、なるべく原曲の根本的性格を変えることのないよう留意する。

2. 学習法

本稿で示す学習法の主な対象者は、音楽大学の学生とする。1曲につき、毎回30分程度、2～3回の授業で実践することを想定している。ただし、学生の専攻、学年、能力を考慮し、臨機応変に対応することが求められる。

2-1. 第1曲〈デルフィの舞姫たち〉⁵⁾／早川

【楽曲の特徴と学習要素】

バス声部、旋律声部、和声声部が明確に分かれており、明解な楽曲構造であることから全体像を把握しやすい。和声声部は密集した和音によっており、常に弱音で演奏するよう要求されているにもかかわらず、多い箇所では最大7つの音が用いられている。この重厚な和声声部に使用されている和音は三和音が中心であるため響きを捉えやすく、あらゆる学習者にとって取り組みやすい楽曲である。

旋律声部は付点のリズムと半音階が特徴的で、主に順次進行している。中間部（第11小節～）で

5) 標題〈デルフィの舞姫たち〉は、神託の聖地デルフィの神殿において儀式の際に舞う巫女たちとされる。

は、この標題が指し示す古代的な雰囲気を表現するために、旋律声部に5音音階が用いられている。第21～24小節に現れる3度音程が中心の旋律線には、この旋律線とともに動く長三和音のみによる平行和音が現れ、この前後とは全く趣を異としている。

この楽曲で学ぶことのできる学習要素として、5音音階、各種の三和音、旋律の表現、が挙げられる。

学習方法

学習1 和音の種類の聴取〔譜例1〕

課題

冒頭から第5小節までのバス声部のみが記された楽譜を見ながら楽曲を聴き、譜例中の□に、和音の種類を記入する。和音を認識しやすくするため、非和声音を省略し、和声の骨組みのみを記した楽譜を用いる。

〔譜例1〕和音の種類の聴取

解答用

解答

長三 増三 短七 属七

長三 短三 短三 長三 短三 長三 長三 長三

学習2 5音音階の旋律〔譜例2〕〔譜例3〕

課題

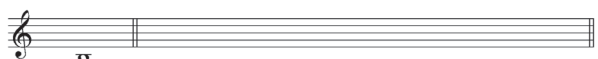
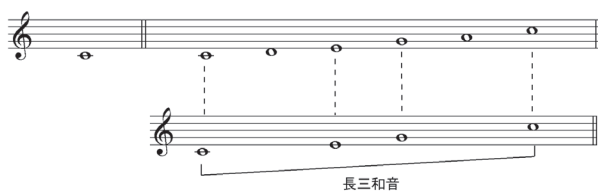
例にならい、与えられた音から5音音階の上行形を歌う予備練習を実施する。次に、第11～14小節の旋律を様々な開始音から歌う。

補足

ここでは長三和音を拠り所として5音音階を認識する。すなわち長三和音の基本形を歌い、この和音構成音の間の音を補完し、5音音階を歌う。

〔譜例 2〕 5 音階の予備練習

例



〔譜例 3〕 5 音階による旋律の視唱

例



学習 3 三和音の認識 1〔譜例 4〕〔譜例 5〕

課題

例にならい、与えられた音を第 3 音として、長三和音、短三和音、増三和音、減三和音を歌い、さらに鍵盤上でも実施する。次に、例にならい第 21 ～ 24 小節の旋律の各音を第 3 音として、長三和音の基本形をピアノで弾く。

〔譜例 4〕 三和音の認識

例



〔譜例 5〕 長三和音の認識 1

例

第21～24小節の旋律

第21小節～

学習 4 三和音の認識 2〔譜例 6〕

課題

与えられた音を第 3 音として長三和音の基本形を歌う。歌い終えた最後の音(すなわち第 5 音)を、次の和音の第 3 音としてさらに長三和音の基本形を歌う。

補足

学習 3 で実施した視唱練習の応用練習である。学習者の声域に合わせて適宜オクターヴ上下させて実施する。

また、重要記号および重変記号を伴う場合は、異名同音に読み替えて実施する。

〔譜例 6〕 長三和音の認識 2

例

第 5 音 → 第 3 音

異名同音で読み替え

学習 5 旋律の表現〔譜例 7〕

課題

この楽曲中の旋律の特徴的な要素を抜粋した課題を、音程を付けずにリズム読みする。

補足

器楽曲は使用される音域が広く、視唱には困難を伴うことが多いため、リズム読みにより学習することが効果的である。したがって、実施にあたっては、旋律を十分に分析し、音程や音形が生み出すニュアンスや緊張感を感じ取り、これら全てを表現しなければならない。

拍子の変化が旋律に与える影響、フレージング、デュナーミクなどを確認する。反復の度に変奏される主題の表現や、シンコペーションの連続により拍節感が薄れる箇所の表現にも留意する。

〔譜例 7〕 旋律の表現



2-2. 第 4 曲 〈音と香りは夕暮れの大気に漂う〉⁶⁾ / 高谷

【楽曲の特徴と学習要素】

この曲の特徴的な点および学習要素を 3 つ挙げる。

まず、主和音へ解決せず半音階的に進行する属七の和音、全音音階や 5 音音階の使用である。豊かな色彩を生み出す様々な和音の響きや、全音階によらない音組織を認識する能力が不可欠である。2 つ目は、拍子およびリズムである。楽曲は 4 分の 3 拍子と 4 分の 5 拍子により記譜されているが、記譜と異なる拍子によるフレーズや、複数の拍子が同時に現れる複合拍子が用いられている。不明瞭な拍子、揺らぎや浮遊感を生み出す自由なリズムはドビュッシーの特徴のひとつである。3 つ目は、動機に含まれる各種の音程である。具体的には、完全 4 度、減 5 度、増 5 度であり、特に重要な役割を果たす完全 4 度は、楽曲全体に多用されている。様々な音程に対する鋭敏な感覚が求められる。

6) 標題〈音と香りは夕暮れの大気に漂う〉は、シャルル＝ピエール・ボードレール Charles-Pierre Baudelaire (1821-67) の詩集《悪の華 *Les Fleurs du mal*》に収められている〈夕べの諧調 *Harmonie du soir*〉の中の一節からの引用である。

この楽曲で学ぶことのできる学習要素として、長三和音、属七の和音における響きの特性の理解、複合拍子の理解と実践、動機を構成する各種音程の認識と実践、が挙げられる。

学習方法

学習 1 音程練習〔譜例 8〕

課題

与えられた音の上方に指示された音程を作り、歌う。次に、この練習の解答となる音を与え、その下方に同じ音程を作り、歌う。

補足

後述の学習 2 の実践に先立ち、完全 4 度、減 5 度、増 5 度音程を認識するための予備練習である。音程感覚を養うため、さらに感覚と理論とを結びつけるため、音名を用いず「ラ」などのシラブルでの視唱と、音名を用いた視唱を実施する。各音程を認識するために、様々な工夫が必要である。例えば、完全 4 度においては、まず完全 5 度を歌い、それを經由する、または転回すると認識しやすい。減 5 度においては、完全 5 度を經由する、または減三和音を拠り所とすると認識しやすい。減三和音を作ることが難しければ、減 5 度上方の音程は短三和音の上行形を、減 5 度下方の音程は長三和音の下行形を拠り所とすることもできる。増 5 度においては、完全 5 度を經由する、または増三和音を拠り所とすると認識しやすい。増三和音を作ることが難しければ、増 5 度上方の音程は長三和音の上行形を、増 5 度下方の音程は短三和音の下行形を拠り所とすることもできる。

ピアノと視唱、または 2 声に分かれて響きを確認し合うなど、学生の能力に応じ練習方法を選択する。

〔譜例 8〕 音程練習

完全 4 度



減 5 度



増 5 度



学習 2 視唱〔譜例 9〕

課題

学習 1 で学んだ完全 4 度、減 5 度、増 5 度の各音程に留意し、楽曲の冒頭から第 8 小節の旋律声部を視唱する。

〔譜例 9〕 視唱



学習 3 リズムと視唱〔譜例 10〕

課題

楽曲の冒頭から第 8 小節の旋律声部、バス声部、内声の和声声部を、視唱と 2 声のリズム打ちで実施する。

補足

変拍子および複合拍子を理解するため、旋律声部は、まず音程をつけずにリズム読みした後、視唱する。声部ごとにリズム練習を実施し、それぞれの声部の本来の拍子を感じ取り、3 声部が異なる拍子であることに注意を向ける。

〔譜例 10〕 リズムと視唱

学習 4 属七の和音〔譜例 11〕〔譜例 12〕

課題

与えられた音の上に属七の和音を作り、基本形、各種転回形を分散和音で視唱する。さらに、第 3 ～ 5 小節の内声部の属七の和音を聴取する。バス音をあらかじめ記しておく。

〔譜例 11〕 属七の和音の予備練習

予備練習 視唱用

例



〔譜例 12〕 属七の和音の聴取

聴取用



学習 5 鍵盤和声〔譜例 13〕

課題

第 35 小節アウフタクトから第 36 小節において、両外声のみ記された楽譜を見て、全ての和音が長三和音の基本形になるように内声を考えながら、ピアノで弾く。さらに、いくつかの調に移調して実施する。

〔譜例 13〕 鍵盤和声



2-3. 第 6 曲〈雪の上の足跡〉／岸

【楽曲の特徴と学習要素】

この楽曲中で最も特徴的なのは、全体を通して様々な音域に現れるオスティナートである。このオスティナートは第 14～15 小節を除き、常に D、E、F 音の 3 音を使用している。

冒頭には、「このリズムは悲しく冷たい風景を表した響きでなければいけない」と記されている。デューナーミクやアーティキュレーションも詳細に記されており、ドビュッシーのこのリズムへの並々な執着が感じられる。

一方、このオスティナート上に現れる旋律には、様々な旋法が用いられている。楽曲全体としては寂寥な雰囲気が漂っているが、その中で旋法が変化を与え、彩りを添えている。

この楽曲で学ぶことのできる学習要素として、様々な音価による三連符、旋律の表現、三和音の

認識、が挙げられる。

学習方法

学習 1 リズム練習〔譜例 14〕

課題

オスティナート声部に用いられる、タイを伴う三連符のリズム練習を実施する。上段は右手、下段は左手でリズムを打つ。上下の声部を交代しての練習も実施する。

〔譜例 14〕 タイを伴う三連符のリズム練習



学習 2 旋律の表現〔譜例 15〕

課題

冒頭から第 13 小節のオスティナートと旋律を、リズム打ちと視唱で実施する。

〔譜例 15〕 旋律の表現

学習 3 三和音の聴取〔譜例 16〕

課題

第 29～31 小節に現れる三和音の種類を聴取する。実施時には、和音の最高音のみ記した楽譜を示す。

〔譜例 16〕 和音の種類を聴取

第29～31小節の旋律構成音

短三 長三 短三 減三 長三 短三 長三 長三 長三 短三 長三 長三

第29小節

2-4. 第 8 曲 〈亜麻色の髪のおとめ〉／齋藤

【楽曲の特徴と学習要素】

ドビュッシーの他のピアノ作品と同様に、前奏曲集においても、ピアノの楽器としての特徴が十分に生かされている。したがって、楽曲中にはピアノに相応しい奏法、例えば、連続する和音による音形、非常に素早いアルペジオや音階によるパッセージ、同音連打、断片的なパッセージが多く見られる。そのため、前奏曲集に含まれるほとんどの楽曲は、ピアノ以外の楽器で表現することが難しい。

それに対し、〈亜麻色の髪のおとめ〉は、旋律の息が長く非常に叙情的であり、旋律楽器による旋律とピアノやハープの和音による伴奏を思い起こさせる曲想である。実際、フルートとピアノあるいはヴァイオリンとピアノなど、旋律楽器とピアノの二重奏に編曲され演奏されることもしばしばである。和声も、旋律と同様に非常に抒情的で、美しさと魅力に溢れている。この楽曲に用いられている和声は、機能และ和声を基盤としながらも、それに留まることなく、ドビュッシーの用いた特徴的な和声進行（平行和音、解決しない属七の和音、旋法を想起させる和声進行など）や、それらを司る和音（付加和音、九の和音、十一の和音の色彩的な使用）が随所に見られる。用いられている和声が非常にシンプルであるからこそ、ドビュッシーの和声の特徴を理解するのに最適な楽曲であ

るといえる。

この楽曲で学ぶことのできる学習要素として、三和音、七の和音、属九の和音の認識、和音数字の理解、終止形の聴取、頻繁な速度変化を伴う旋律の表現、が挙げられる。

学習方法

学習 1 和声進行と終止の聴取および和音数字〔譜例 17〕〔譜例 18〕

課題


冒頭、第 8 小節、第 28 小節から現れる主題において、伴奏部のバス声部、和音数字、譜例に記された□の中に終止形をそれぞれ聴き取る。

補足


3 度音程による上行と下行が交替する主題により楽曲が開始する。この主題は楽曲を通じて 3 回提示される。3 回とも主調の Ges dur で提示されるが、現れるたびに付される和声と用いられる終止形が異なる。2 回目の主題における和音数字は、指示された箇所のみ実施する。2 回目の主題の終止に見られるように、ドビュッシーの楽曲には九の和音や十一の和音、付加音を伴う和音が用いられることも多い。したがって、終止については、理論的な理解だけではなく、感覚を養うことが求められる。

〔譜例 17〕 和声進行と終止の聴取（解答用）

1 回目




2 回目



和音数字

3 回目



〔譜例 18〕 和声進行と終止の聴取（解答例）

1 回目

2 回目

3 回目

学習 2 旋律と和声進行の聴取および和音数字〔譜例 19〕

課題

第 5、6 小節の旋律、バス、和音数字を書く。

補足

近代の楽曲では、機能と声によらない和声進行がしばしば用いられる。このような楽曲を演奏する際に欠かせないのは、垂直の響きに対する鋭敏な感覚、すなわち瞬時に垂直の響きを捉える能力である。また、機能と声によらない楽曲の和声分析には、通奏低音に用いられる和音数字が適している。

〔譜例 19〕 学習 2 の解答例

課題

予備練習の後、第17、18小節の演奏を聴き、属九の和音を指摘する。

Musical notation for the bass line of 'The Rose Tree'. The staff is in bass clef and contains a sequence of notes: G2, A2, B2, C3, D3, E3, F3, G3, A3, B3, C4, D4, E4, F4, G4, A4, B4, C5, D5, E5, F5, G5, A5, B5, C6, D6, E6, F6, G6, A6, B6, C7, D7, E7, F7, G7, A7, B7, C8, D8, E8, F8, G8, A8, B8, C9, D9, E9, F9, G9, A9, B9, C10, D10, E10, F10, G10, A10, B10, C11, D11, E11, F11, G11, A11, B11, C12, D12, E12, F12, G12, A12, B12, C13, D13, E13, F13, G13, A13, B13, C14, D14, E14, F14, G14, A14, B14, C15, D15, E15, F15, G15, A15, B15, C16, D16, E16, F16, G16, A16, B16, C17, D17, E17, F17, G17, A17, B17, C18, D18, E18, F18, G18, A18, B18, C19, D19, E19, F19, G19, A19, B19, C20, D20, E20, F20, G20, A20, B20, C21, D21, E21, F21, G21, A21, B21, C22, D22, E22, F22, G22, A22, B22, C23, D23, E23, F23, G23, A23, B23, C24, D24, E24, F24, G24, A24, B24, C25, D25, E25, F25, G25, A25, B25, C26, D26, E26, F26, G26, A26, B26, C27, D27, E27, F27, G27, A27, B27, C28, D28, E28, F28, G28, A28, B28, C29, D29, E29, F29, G29, A29, B29, C30, D30, E30, F30, G30, A30, B30, C31, D31, E31, F31, G31, A31, B31, C32, D32, E32, F32, G32, A32, B32, C33, D33, E33, F33, G33, A33, B33, C34, D34, E34, F34, G34, A34, B34, C35, D35, E35, F35, G35, A35, B35, C36, D36, E36, F36, G36, A36, B36, C37, D37, E37, F37, G37, A37, B37, C38, D38, E38, F38, G38, A38, B38, C39, D39, E39, F39, G39, A39, B39, C40, D40, E40, F40, G40, A40, B40, C41, D41, E41, F41, G41, A41, B41, C42, D42, E42, F42, G42, A42, B42, C43, D43, E43, F43, G43, A43, B43, C44, D44, E44, F44, G44, A44, B44, C45, D45, E45, F45, G45, A45, B45, C46, D46, E46, F46, G46, A46, B46, C47, D47, E47, F47, G47, A47, B47, C48, D48, E48, F48, G48, A48, B48, C49, D49, E49, F49, G49, A49, B49, C50, D50, E50, F50, G50, A50, B50, C51, D51, E51, F51, G51, A51, B51, C52, D52, E52, F52, G52, A52, B52, C53, D53, E53, F53, G53, A53, B53, C54, D54, E54, F54, G54, A54, B54, C55, D55, E55, F55, G55, A55, B55, C56, D56, E56, F56, G56, A56, B56, C57, D57, E57, F57, G57, A57, B57, C58, D58, E58, F58, G58, A58, B58, C59, D59, E59, F59, G59, A59, B59, C60, D60, E60, F60, G60, A60, B60, C61, D61, E61, F61, G61, A61, B61, C62, D62, E62, F62, G62, A62, B62, C63, D63, E63, F63, G63, A63, B63, C64, D64, E64, F64, G64, A64, B64, C65, D65, E65, F65, G65, A65, B65, C66, D66, E66, F66, G66, A66, B66, C67, D67, E67, F67, G67, A67, B67, C68, D68, E68, F68, G68, A68, B68, C69, D69, E69, F69, G69, A69, B69, C70, D70, E70, F70, G70, A70, B70, C71, D71, E71, F71, G71, A71, B71, C72, D72, E72, F72, G72, A72, B72, C73, D73, E73, F73, G73, A73, B73, C74, D74, E74, F74, G74, A74, B74, C75, D75, E75, F75, G75, A75, B75, C76, D76, E76, F76, G76, A76, B76, C77, D77, E77, F77, G77, A77, B77, C78, D78, E78, F78, G78, A78, B78, C79, D79, E79, F79, G79, A79, B79, C80, D80, E80, F80, G80, A80, B80, C81, D81, E81, F81, G81, A81, B81, C82, D82, E82, F82, G82, A82, B82, C83, D83, E83, F83, G83, A83, B83, C84, D84, E84, F84, G84, A84, B84, C85, D85, E85, F85, G85, A85, B85, C86, D86, E86, F86, G86, A86, B86, C87, D87, E87, F87, G87, A87, B87, C88, D88, E88, F88, G88, A88, B88, C89, D89, E89, F89, G89, A89, B89, C90, D90, E90, F90, G90, A90, B90, C91, D91, E91, F91, G91, A91, B91, C92, D92, E92, F92, G92, A92, B92, C93, D93, E93, F93, G93, A93, B93, C94, D94, E94, F94, G94, A94, B94, C95, D95, E95, F95, G95, A95, B95, C96, D96, E96, F96, G96, A96, B96, C97, D97, E97, F97, G97, A97, B97, C98, D98, E98, F98, G98, A98, B98, C99, D99, E99, F99, G99, A99, B99, C100, D100, E100, F100, G100, A100, B100, C101, D101, E101, F101, G101, A101, B101, C102, D102, E102, F102, G102, A102, B102, C103, D103, E103, F103, G103, A103, B103, C104, D104, E104, F104, G104, A104, B104, C105, D105, E105, F105, G105, A105, B105, C106, D106, E106, F106, G106, A106, B106, C107, D107, E107, F107, G107, A107, B107, C108, D108, E108, F108, G108, A108, B108, C109, D109, E109, F109, G109, A109, B109, C110, D110, E110, F110, G110, A110, B110, C111, D111, E111, F111, G111, A111, B111, C112, D112, E112, F112, G112, A112, B112, C113, D113, E113, F113, G113, A113, B113, C114, D114, E114, F114, G114, A114, B114, C115, D115, E115, F115, G115, A115, B115, C116, D116, E116, F116, G116, A116, B116, C117, D117, E117, F117, G117, A117, B117, C118, D118, E118, F118, G118, A118, B118, C119, D119, E119, F119, G119, A119, B119, C120, D120, E120, F120, G120, A120, B120, C121, D121, E121, F121, G121, A121, B121, C122, D122, E122, F122, G122, A122, B122, C123, D123, E123, F123, G123, A123, B123, C124, D124, E124, F124, G124, A124, B124, C125, D125, E125, F125, G125, A125, B125, C126, D126, E126, F126, G126, A126, B126, C127, D127, E127, F127, G127, A127, B127, C128, D128, E128, F128, G128, A128, B128, C129, D129, E129, F129, G129, A129, B129, C130, D130, E130, F130, G130, A130, B130, C131, D131, E131, F131, G131, A131, B131, C132, D132, E132, F132, G132, A132, B132, C133, D133, E133, F133, G133, A133, B133, C134, D134, E134, F134, G134, A134, B134, C135, D135, E135, F135, G135, A135, B135, C136, D136, E136, F136, G136, A136, B136, C137, D137, E137, F137, G137, A137, B137, C138, D138, E138, F138, G138, A138, B138, C139, D1

A musical score for the song 'The Rose Tree'. It features a treble and bass staff in 3/4 time, key of B-flat major. The melody is in the treble staff, and the bass line is in the bass staff. The score includes a double bar line with a repeat sign and a key signature change to B-flat major.

課題

第8小節からのフレーズにおいて、前半には属七の和音による平行和音が付されている。また、この属七の和音は不安定な印象を与える第3転回形である。これらにより、浮遊感が漂う。後半は完全

終止によりフレーズが閉じられる。この時、バス声部にはここまでにおける最低音が現れ、ドミナントには十一の和音が用いられ不協和な響きとなる。

質問 4 冒頭から第 19 小節において、クライマックスとなり得る箇所を考えなさい。

解答の例 第 6 小節 3 拍目、第 13 小節、第 16 小節。

質問 5 質問 3 で挙げたクライマックスへ、どのように導かれているかを分析しなさい。

解答の例 第 6 小節におけるクライマックスの音はここまでの最高音であり、この音をもってフレーズが終止する。第 5 小節からは、旋律の全ての音に三和音の基本形を伴い、それまでの浮遊感の漂う雰囲気とは対照的な安定感のある曲想となる。さらに、バス声部と旋律声部に反行の連続 8 度が用いられ終止感を強めている。

第 13 小節におけるクライマックスの音は、第 12 小節アウフタクトから、1 オクターヴと 6 度の広音域を上行し続ける音形の着地点となっている。また、主和音への解決点でもある。クライマックスの後には 1 小節間の短い下行による順次進行を経て、新たなフレーズを開始する。

第 16 小節におけるクライマックスの音も、第 13 小節と同様に、その 1 小節前から広音域を上行し続ける音形の着地点となっている。しかし、第 13 小節に比べ、上行する音域が 2 オクターヴへと広がっていること、16 分音符の速い動き、長いクレッシェンド、急な転調を伴い、一気に駆け上る印象が強いことに注意しなければならない。クライマックスの後、クライマックスに用いられた音形が 2 度反復され、2 小節間をかけて緩やかに下行し、完全終止によりフレーズを閉じる。

補足

後述の**学習 5**の実施に先立ち、冒頭から第 19 小節の旋律の分析と演奏解釈について考える。ここで重要なのは、学習者が自ら分析、解釈する能力を養うこと、さらに分析事項を表現へと生かせるよう導くことである。したがって、ここでは分析や解釈のポイントとなり得る箇所を示し、分析や解釈を導くためのヒントとなる 5 つの質問を投げかけ、学習者に考えさせる。

学習 5 旋律の表現

課題

冒頭から第 19 小節の旋律を、音程を付けずにリズム読みする。対位的書法の見られる第 10 ～ 11 小節と第 14 小節においては、内声の 16 分音符による旋律および付点リズムによる伴奏部をリズム打ちしながら実施する。

補足

学習 4での分析事項を踏まえ、フレーズ構造を理解し、背後の和声を感じ取り、デュナーミクやアーティキュレーションおよび速度変化の持つ意味合いと効果を見出し、それら全てを表現することが重要である。

3. 結び

ソルフージュでは、特定の学習要素に焦点を当てた教材や練習課題を用いた基礎訓練と、実作品を用いたFMを組み合わせた学習が最も有効である。しかしながら、それらを有機的に結びつけた授業実践は、指導者に多くの裁量を委ね、負担も大きいものとされてきた。本稿で提案した教材と学習法は、この実情を鑑み、基礎訓練と総合学習の両立を目指す基礎研究の試みであり、次年度以降に、実際の大学の授業で実践し、検証を行う予定である。

さらに本稿では、近代作品の理解へ結びつくFM教材の不足に着目し、ドビュッシーの《前奏曲集第1集》より、〈デルフィの舞姫たち〉、〈音と香りは夕暮れの大きに漂う〉、〈雪の上の足跡〉、〈亜麻色の髪のおとめ〉の4曲を取り上げ、音楽大学の学生を対象とした教材と学習法を具体的に提案した。学習要素として扱ったのは、音組織の学習については5音音階、各種音程、各種和音であり、リズムの学習については複合拍子、タイを伴う連符、分析の学習については和音数字、終止形、旋律の分析である。そして、これらを総括する学習として、旋律の表現を取り扱った。

ソルフージュは音楽の基礎教育として読譜から表現に至る重要なプロセスを担っており、音楽家の育成には欠かせないものである。その学習の中心となるのは、読譜、視唱、リズム練習、聴覚形成であり、具体的な表現方法についてはソルフージュの範疇とするところではなく学習者に委ねられることとなるが、ソルフージュでの学習を個々の練習で完結させることなく、個々の学習事項、すなわち読譜事項と音楽との溝を補う役割を果たすものがFMである。西洋音楽の長い歴史の中で、多くの音楽様式と音楽語法が生み出されてきたが、19世紀末以降、その傾向は特に著しい。過去の作品に見られる様々な様式や音楽語法を理解し、さらには、今なお拡大し続ける新たな様式や音楽語法を理解するために、FMによる学習は有効である。

そのため、指導現場でのニーズに応え、効率的な教授の一助となるようなFM教材の開発は、喫緊の課題のひとつであり、様々な様式や音楽語法に対して、新たな教材と学習法を考案していくことを本研究の最終的な課題と考えている。

■主要参考文献■

1. 洋書

- ・ Chépélov, Pierre, and Benoît Menut. 2002-09. *La dictée en musique. Rythme, mélodie, harmonie, timbre*. Paris: Henry Lemoine.
- ・ Lesure, François, and Roy Howat. 2001. "Debussy." *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2nd ed. Edited by S. Sadie, London: Macmillan Publishers, vol. 7, pp. 96-119.
- ・ Truchot, Alain, and Michel Meriot. 1987-91. *Le Guide de Formation Musicale 1re ~ 9e année*. Paris: Editions COMBRE.

2. 和書

- ・照屋正樹 1994「ソルフェージュからフォルマシオン・ミュージカルへ——フォルマシオン・ミュージカルの教育現況と課題」『洗足論業』第23号:111-122。
- ・野平多美 1994「フランスのフォルマシオン・ミュージカル——音楽家の基礎形成の行方」『国立音楽大学研究紀要』第29号:191-201。
- ・別宮貞夫 2005『ドビュッシー 前奏曲第1集 全曲研究』東京：芸術現代社。

3. 楽譜

- ・Debussy, Claude. *Préludes*: Paris: Durand, 1957.
- ・ドビュッシー、クロード『前奏曲第1集』安川加寿子（1969）ピアノ曲集V 東京：音楽之友社。

C. Debussy's *Préludes* as a Material for Solfège

Noriko TAKATANI, Minako KISHI, Keiko SAITO, Satomi HAYAKAWA

This is a report on our attempt to develop *formation musicale* teaching materials based on *Préludes premier livre* by Achille-Claude Debussy (1862-1918), with a view to providing basic approach to assist instructors. Since the second half of the nineteenth century, many new styles and musical idioms have come to be employed, and we often have to find appropriate ways to analyze for each musical composition. *Formation musicale*, which is an integrated learning method based on actual works, seems to be very effective in responding to various musical styles and idioms that continue to expand.

Préludes are filled with unique musical idioms of Debussy, one of the founders of modern music. Learning solfège with *Préludes* will introduce the learners to the vast numbers of modern musical compositions since the late 1800s including other works by Debussy.

This paper focuses on the four pieces, No.1 *Danseuses de Delphes*, No.4 *Les sons et les parfums tournent dans l'air soir*, No.6 *Des pas sur la neige* and No.8 *La fille aux cheveux de lin*. From each composition, we pick out learning elements to learn in solfège and show concrete methods of learning through sight-singing, rhythm practice, music dictation, keyboard harmony and analysis.

■ 研究レポート ■

実作品を用いたソルフェージュ教材および学習法への提案

ー C. ドビュッシー 《前奏曲集第1集》を題材として ー

高谷典子・岸美奈子・齋藤圭子・早川聡美

本稿は、クロード・ドビュッシー Achille-Claude Debussy (1862-1918) の《前奏曲集第1集 *Préludes premier livre*》を題材としたフォルマシオン・ミュージカル教材開発の試みをレポートするものであり、かつ、指導者の実践の一助となる教材の在り方への基礎的取り組みとなることを目的としている。19世紀後半になると、多くの新たな様式と音楽語法が用いられるようになり、楽曲ごとに分析方法を見出さなければならないことも多い。拡大し続ける様々な様式や音楽語法に対応するためには、実作品を用いた総合学習であるフォルマシオン・ミュージカルが非常に効果的であるように思われる。

近代音楽の創始者のひとりとして位置づけられているドビュッシーの音楽語法が豊富に含まれる《前奏曲集》を用いた学習は、ドビュッシーの他の楽曲はもちろん、さらには、19世紀末以降の多くの楽曲へと応用し、役立てられるものである。

本稿では、第1曲〈デルフィの舞姫たち〉、第4曲〈音と香りは夕暮れの大気に漂う〉、第6曲〈雪の上の足跡〉、第8曲〈亜麻色の髪のおとめ〉の4曲を取り上げる。各楽曲においてソルフェージュで学べき学習要素を抽出し、視唱、リズム練習、各種聴音、鍵盤和声、分析による具体的な学習法を示す。